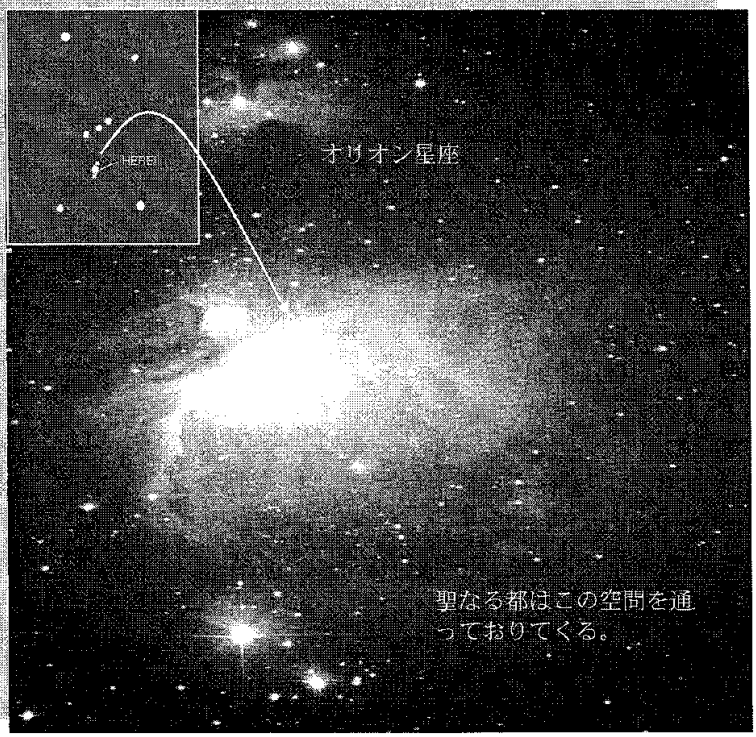
Anchor

２９号

2002年12月

わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。詩篇八ノ三，四



もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。詩篇一九ノ一

注目されるオリオン星座

インターネットでオリオン星座のことを調べてみますと、実に多くの天文愛好家たちが、オリオンの観察をして、写真を撮っているのに驚かされます。ある人は、「その美しさはたとえようがありません」と言っています。

2000年前に、異教の国の博士たちは、星を観察していてメシアの来臨のしるしを見つけました。そしてメシアに会う特権が与えられたのです。

キリストの再臨の迫っている今日、その日時を知らせる天からの声も、オリオン星座から聞かれるといわれています。キリストも千々万々のみ使いを率いてオリオン星座の空間を通って来られると記されています。近年、特に注目を集めているオリオン星座のM42は、我々再臨信徒にどんなメッセージを与えてくれるのでしょうか。

上を見上げなさい。あなた方の救いが近づいているのだから。

吉弘　明兄

福岡県の星野村という所には、星の文化館という天文台があります。大分県には、佐賀関半島の突端に小高い見晴しのよい丘があって、ここには関崎海星館という天文台があります。ここの望遠鏡は、60cmの反射望遠鏡です。

現在、世界で一番大きな望遠鏡は多分カルフォニア州、パロマー山上にある200インチ（5メートル強）の望遠鏡ではないかと思います。

肉眼で見える星の数はだいたい1026位で、望遠鏡が発明された時、星の数は10万、2インチ（約5cm）では30万、40インチ（約1m）では1億、それから100インチ、200インチ（約5m強）と望遠鏡が大きくなるにつれて、天の星の数は数えることができなくなりました。

「天の星は数えることができず」（エレミヤ33:22）。もちろん聖書は専門の科学書ではありませんので系統的に科学を教えるものではありませんが、神のことばと自然科学は矛盾するものではなく、むしろ科学の進歩は、神のことばの正しさを立証するものとなっており、これも聖書が神のことばであることの証拠ともなっているものです。

夜空に輝く星の世界を仰ぎ見て果てしなく広がる大宇宙を眺めて神秘的美しさに感動して、誰がこれらのものを創造したのであろうかといった疑問は、昔から人々の心をとらえてきた問題でした。今日、一般的には進化論の影響を受けて世界は偶然的に発生し、アメーバーのような単細胞から進化の過程を経てできたものと考えられています。

自然科学の分野では科学的実証性を基礎として成り立っているもので、科学的学説は事実をもって証明されたものの上に成り立っているわけですが、しかし世界はどうしてできたかといった問題は、実験室の中で簡単に立証できるような問題ではありませんので、科学者でもこれらの問題を論じる時には、従来の科学的立証法の立場をとることができないため、色々な推測とか仮定といった立場をとらざるを得なくなります。したがって、結論に至っては真実であるかどうかを見極めることが難しく、甚だ曖昧なものとなってしまいます。

ダーウィンによって提唱された進化論は、科学的立証法に基いたものではなく、憶測の範囲にしかすぎないもので、科学的立証性に欠けています。世界の起源といった問題は、自然科学の範囲内では解明することのできないものなのです。実際には、満足すべき解答を与えてくれるような学説はこの世界には存在しないのが現実と言えます。世界の起源については、ただ聖書だけがはっきりした解答を与えてくれています。

「はじめに神は天と地とを創造された」（創世記1:1）。「目を高く上げて、誰がこれらのものを創造したかを見よ」（イザヤ40:26）。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざを示す。この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に告げる。話すことなく語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界の果てにまで及ぶ」（詩篇19:1-4）。

最近は、各地に一般市民向けに公開されている天文台とか、人工的星空をかたどったプラネタリウム、科学館等の施設が設けられて、天体観測を楽しまれる天文愛好家が増えてきています。望遠鏡を自作したり、中には自分で天文台を建てて本格的に天体観測をされる方もおられます。

夏の夜空に流れる天の川、無数にきらめく銀河、季節毎に現れる星座、急に現れる彗星、月や惑星、恒星の観測。天文愛好家達にとって星空の観測は興味のつきないものです。

今日、天文愛好家達の中で、人気ナンバーワンの星はオリオン星座の中にあるM42といわれる星で、全天随一の見ものといえるほど、最高に美しい星だそうです。

それでは今からそのM42の星の紹介をしましょう。良く晴れた夜には肉眼でも見えますが、双眼鏡では淡いピンクの広がりが見えます。星というよりも、星雲に光が反映して美しく輝いて見えるもので、宇宙の神秘さを実感させてくれます。

この淡いピンク色の広がりは、ちょうど花の開いたお椀型のようなもので、その直径は30光年、光の速さで30年以上ある巨大なものです。地球からの距離は1500光年、光の速さで飛んでいっても1500年かかるほどの距離です。

オリオン星座は、秋になると現れ、翌年春先の5月頃には見えなくなります。天体の赤道の位置にあるため、真東から昇って真西に沈む星座です。

オリオン星座の中に斜めに三つ並んでいるのが三ツ星、縦に三つ並んでいるのが小三ツ星で、小三ツ星の真ん中の星がM42といわれる星です。

大型望遠鏡で撮影した写真は、更に美しい迫力ある姿をしていて、宇宙の神秘さが漂って見えます。更に大型望遠鏡で長時間露出した写真では、実に複雑な模様が現れて見えます。

更に遮光レンズを使って、光を抑制して撮った写真には、M42の星の中心部に今まで見えなかった四つの星が現れて見えます。ほぼ正方形に並んだ四つの星はトラペジユームと呼ばれて青白い光を放って表面温度が4万度もあります。これがあのすばらしい輝きの光源となってM42の大星雲を美しく照らしていることがわかります。

ホワイト夫人は、この四つの星の空間を「オリオン星座の空間」と呼んでいます。また、「天の空間」ともいわれます。この「天の空間」の向こうには、更に中央の天があって、そこには神の玉座があります。「天の空間」というのは、神のおられる中央の天に通じる入り口となっており、天と地とを結ぶ通路となっているものなのです。

将来、世界が暗黒に覆われた時、天の一角に言うに言われぬほど美しく栄光に輝いているところがあるのを、ホワイト夫人は幻で示されましたが、これは「天の空間」から輝き出ている神の国の栄光であることがわかります。

イエス・キリストが全天使と共に再臨される時は、この「天の空間」を通って来られます。新エルサレムが、神のもとを出て地上に降下してくる時は、この「天の空間」を通って地上に降下してきます。

救われた人たちに神ご自身が祝福のことばを宣言され

る時も、この「天の空間」を通って全地に響き渡ります。それは荘厳極まりないもので、厳粛な光景といえましょう。救われた人たちが、キリストに引導されて神の国に移る時も、この「天の空間」を通って導かれます。

地球からここまでの距離は1500光年ですが、キリストに導かれて神の国へ行く時は、一週間で到着できます。ちょうどここで安息日を迎えて、天国の入り口で安息日を過ごします。写真で見てもすばらしく美しいところだそうですが、実物は筆や言葉では表現できるものではなく、見る者にしかわからないものでしょう。

もうここまでくれば、神のみ座のまわりで絶え間なく献げられている天使の合唱隊の賛美の歌声が聞こえてきます。賛美の調べは天の雰囲気です。

地上で歌われる賛美の調べは、家庭であっても教会であっても天の雰囲気に調和するもので、天の合唱隊の献げる賛美の歌声と一緒になって、神の御許に献げられるものです。

天と地と交わる時、そこには音楽と歌があります。賛美の調べは、神への礼拝であり祈りであり、天の雰囲気によって私達は礼拝の精神を学ぶのです。

今日、地上で起こっている出来事は、暗いニュース、悲観的な出来事が多いのに比べて、天体の世界には、すばらしい未知の世界が広がっているのが見えます。

「上を見上げなさい。あなた方の救いが近づいているのだから」ルカ21:18、欽定訳■

預言者エレン・ホワイトは、154年前にオリオン星座の幻を見せられました。初代文集104ページに次のように描写しています。：

> 「1848年12月16日に、主はもろもろの天体が揺り動かされる幻を、わたしにお与えになった。主がマタイ、マルコ、ルカに記録されているしるしをお与えになったときに「天」と言われたのは天のことであり、「地」と言われたのは地上のことであることをわたしは見た。天体とは、日、月、星のことである。これらのものは天を支配している。地の権力とは、地上を支配しているもののことである。天体は神の声によって揺り動かされる。そのときに、日、月、星は、それぞれの場所から動かされる。それらはなくなってしまうのではなくて、神の声によって揺り動かされるのである。
>
> 重い黒雲が現れて互いにぶつかり合った。大気は分かれて巻き去られた。そのときにわれわれは、オリオン星座の空間を通してその向こうを見ることができた。そこから神のみ声が聞こえた。聖なる都は、この空間を通っておりてくる。わたしは、地の権力が今、揺り動かされて、いろいろの事件が次々に起こるのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、ききん、疫病などがまず地の権力を揺り動かす。そして、それから神のみ声が、日、月、星を揺り動かし、この地球をも揺り動かす。」

十字架を掲げよ！　十戒を掲げるな？

福音を説け！　律法を強調するな？

最近、あちらこちらからセブンスデー・アドベンチストが変化しつつあるのではないかとの声が聞こえる。今までは、律法主義であったが、今日は福音的になったと喜ぶ人達もいれば、今まで説いてきたのは何であったのか、どこかがおかしいと嘆いている人達もいる。人間は、極端から極端にいともたやすく変わるようである。

セブンスデー・アドベンチストの変化は、1888年から起こったとする人と、1957年に福音主義学者との交流の時から起こったと指摘する人がいる。アドベント・レビューのウッド元編集長などは後者である。元世界総会総理のピアソン長老は、今日のセブンスデー・アドベンチストは、徐々に変化してきて、「その後、ほかの世代が起こったが、これは主を知らず、また主がイスラエルのために行われたわざをも知らなかった」と士師2:10を引用して嘆いた。

どこから、いつ、どのように変わってきたのかを追究することはさておいて、今日説かれていることは、聖書と証の書で福音と言われるものだろうかという点を検証してみたい。

「信仰による義」「福音中心」「イエス・キリスト中心」「十字架中心」という名目のもとに、律法への服従ということが軽視され、強調されなくなっている現状を見せられているからである。ある牧師が「さばき」について説教をした。指導者に「今はそんなことを説教するときではない」と注意されたという。律法とか、さばきとか、再臨の切迫とか、日曜休業令の接近とか、終末事件を説くのは古く、時代遅れであり、人を不安、恐怖に陥れると言って嫌悪される時代になった。

M先生の主張：

> 「私たちの救いは最終的に私たちの完全な罪のない状態にかかっているのでしょうか。それとも、イエス・キリストの完全な生涯と十字架の恵みによるのでしょうか。よく考えてみますとエデンの園でも、また天国でも私たちの存在すべてはあくまでも神様の恵みでしかありえないのではないでしょうか。
>
> 神の模範に従うとの考えが極端になりますと、それは悪魔の最初の誘惑である『あなたは神のようになるでしょう』（創世記3:4）と似てくるのです。また、新約聖書の時代にはパリサイ人は律法に熱心過ぎるあまり律法の本質であるイエス・キリストを完全に見失ってしまったのです。

私たちSDAは何を掲げていくのでしょうか。次の二つの絵を参考にして考えていただきたいと思います。どちらの絵をホワイト夫人は推薦したと思いますか。上の絵はジェームズ・ホワイトが1876年に公にしたものであり、その中心は木にかけられている十戒であり、十字架が小さく見えるのです。その当時のアドベンチストの考え方が表されているのです。しかし1880年代になり、キリストの義と恵みが再発見されるようになった時、ホワイト夫人自身が下の絵を作成するように依頼したのです。なんという相違でありましょう。十戒は見えなくなり、キリストの十字架が中心を占めるようになるのです。アドベンチストは十戒や、天の聖所のキリストの働きを高く掲げるのではないのです。」[1]

M先生は、キリストの民のための仲保の働きは、再臨まで続き、罪なき完全はあり得ないとしている。証の書に記されている、生きて主を迎える人々の「特別な清め」「特別なあがない」を強く否定している。

「別の言葉では清めの働きは特別に最終時代の民にされている。ホワイト夫人は明確に、終末をもたらす要求されているのではなく、いつの時代にも要求のは人間の側の応答の状態ではないことを説いています。」同p26

「イエス・キリストが律法を守って神のご品性の擁護をすでになさったのなら、なぜさらに最終時代の聖徒がそれをしなければならないのでしょう。」同p27

同じようにS先生もこう言っている：

「しかし、残念ながらアドベンチストの中にも聖所の教理を福音としてではなく、人々を不安に陥れ、キリストから目をそらさせるメッセージとして説く人たちがいます。至聖所にある契約の箱、そしてその中にある十戒を強調し、恵みの期間が閉ざされるとき、キリストの仲保なしに、完全な者として立つことができなければ、悩みの時を通り抜けることはできないといった強調です。」[2]

最初にお断りしたいのは、私は決して個人攻撃をしているのではないということである。ただ、最近、一般的にわが教会にも、諸教会のように次のような現象が見られることを危惧するのである。

「神の純潔と神聖さ、あるいは自分自身の罪と汚れについて、正しい考えを持つことができない。罪についての真の自覚もなく、悔い改めの必要も感じない。自分たちが神の律法の違反者であるという失われた状態を悟らず、キリストの贖罪の血の必要を自覚しないのである。心の根本的変化も生活の改変もなしに、救いの希望を受け入れる。このような表面的改心が広く行なわれていて、キリストと結合したことのない多くの者が教会に加えられている。」(大争闘下196)

私は、「厳正な信仰を軽視する自由主義」に賛成できない。神の義を神の慈悲から引き離す「新神学」に賛成できない。神学によって信徒の生活が形作られていく。指導者の言動は信徒に多大な影響を与えることを考えると、今は黙すべき時ではないと思い、あえてはっきり書くことにした。そうすれば、信徒は各自与えられた光に応じて判断していくことと思う。「わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。」（ローマ14:12）生ける者のさばきが非常に近づいている。正しい律法観、福音観をもたずにさばきと直面したときには遅すぎるからである。

１９５０年にサンフランシスコでセブンスデー・アドベンチストの世界総会が開かれた。「キリスト中心の説教」が強調された総会であった。１８８８年から６２年経過していた。１８８８年の「信仰による義」のリバイバルとも見える様相であった。み業完成が遅れていることを痛感し、何か新しいものに飢えていた。代議員たちは、この「キリスト中心」の宣教こそ後の雨、大いなる叫びをもたらすものではないかとの思いに満ちていた。多くの教役者たちを感動させた。

しかし、アフリカから、世界総会のために、一時帰国していた二人の宣教師が鋭い観察をしていた。ロバート・ウィーランドとドナルド・ショートであった。彼らは、この熱狂振りを「バール礼拝」だと痛烈に批評した。「キリスト中心」の説教は、「反キリスト中心」の説教だと言った。[3] 彼らは、世界総会の役員に236ページの「１８８８年再吟味」という論文を提出した。それは後に信徒の手にも入るようになった。私もはじめてわが教会で１８８８年に重大なことが起こったことを知った。１８８８年にミネアポリス世界総会で起こったことは、ちょうど古代イスラエルがカデシ・バルネアで数日のうちに「乳と蜜の流れる地」に入るか、あるいは、４０年の荒野の流浪かを決定したように、現代の霊的イスラエル、セブンスデー・アドベンチストにとって重大事件であった。ウイーランド、ショートによる、１８８８年のエピソードやメッセージについて、井深姉妹によって翻訳され、関係文書が出されていることはありがたいことである。[4]

１９５０年代のようなことが今日もまた起きているように思われる。「キリスト中心」「十字架を説教し、歌

---

1 「罪、完全について、聖書とホワイト夫人の書物からの学び」（プリント）p29

2 「安息日学校聖書研究ガイド、プラス」2002、3期、p64

3 "Preliminary Memonrandum" p63-66

4 井深光子姉の連絡場所：〒395-0048　飯田市滝ノ沢5817-88
FAX　0265-24-8094

い、祈れ」のもとに神の律法、至聖所における最後のあがない、教理の研究、預言の研究、教会の標準などが軽視され、セレブレーション的な礼拝に傾いていることは、セブンスデー・アドベンチストを最後の教会としてこよなく愛している私の心を痛めている事実である。

イエスの十字架を掲げるのであって、律法ー十戒を掲げるべきではないという表現は、多くの信者に真の福音を曲解させる。それでこの記事で、律法と福音、十字架と十戒の関係を考えてみたいと思った。

キリスト、キリストの叫び！

「今日、クリスチャンと自称する者たちは、キリスト、キリストこそが我々の義であると叫ぶが、律法を退ける。彼らは、キリストの使命は、天父の律法を無効にするためにこの堕落した世界にこられたかのように話したり、行動する。.....牧師達は、贖いが神の律法を破り、罪を犯す自由を与えたと説き、また、キリストを通して恵みと憐れみが示されたことを賛美しながら、一方では神の律法をさげすむのである。」RH, May 6, 1875 par. 15

十字架だ、イエスだ、福音だと言って神の律法を軽視することは一般キリスト諸教会、すなわちバビロンのすることである。しかし、この風潮が我々セブンスデー・アドベンチスト教会でも聞かれるようになってきているのである。

「ここにキリストがおられる、ほらここにキリストがと人々は叫ぶ。しかしそこにキリストはおられるのだろうか？　その足で戒めを踏みつけるとき、キリストはこう言われる。『誰でも、戒めの一つでも破る者は、天に認められないであろう（マックナイト氏に対して）。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはないのである。』ある人はわたしに言った、あなたはどうしてそんなに律法について語るのですか、なぜもっとイエスについて語らないのですかと。我々が律法について語るとき天父と御子をあがめるのである。天父は律法を与えられ、御子はそれを拡大し、尊ぶべきものとするために死なれたのである。」1SAT 20

ユダヤ人の大きな罪、キリスト教会の大きな罪！

「ユダヤ人の大きな罪は、彼らがキリストを拒んだことであった。キリスト教会の大きな罪は、天地を支配する神の統治の基礎である神の律法の拒否ということである。主の戒めは、軽べつされ、無視されるのであった。」大争闘上 8

愛がなければならないとの叫び！

「われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。『愛がなければならない』は、どこででも聞かれる叫びである。特に、きよめられたと言っている人たちから聞かれる。しかし、真の愛は純粋であって、告白されていない罪をおおい隠すことはできない。キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たちに、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、正義のために断固として立つよう要求されている。」患難下 258

「われわれはクリスチャンの親切を示さなければならないが、罰や罪人をそれとはっきり言う権威も与えられている、そして、これは真の愛と矛盾しないと、使徒ヨハネは教えている。」　同

聖書解釈の原則が守られていないために混乱が見られる。その原則とは、①文脈からはずれてはならない。②象徴や比喩が用いられていないかぎり、その明瞭な意味に従って解釈する。そしてもう一つは、次の原則である：

「救い主の一つの言葉をもって、他の言葉を無意味にしてはならない。」大争闘下 69

パウロは、「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」（ガラテヤ 6:14）と言っている。彼は、「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である」と強調している（エペソ 2:8）。しかし、同時に彼は「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」（ローマ 3:31）とも強調しているのである。

「カルバリーの十字架を掲げること、これこそパウロの言葉と行動を起こさせる動因、彼を全く夢中にさせる動機であった。」患難下 178

「パウロは、常に神の律法を高く掲げた。」患難下 77

福音と律法を切り離すことはできない。

「敵はいつでも、律法と福音を分離するために働いてきた。それらは切っても切れない関係にある。」（MS 11, 1893 年）スタディバイブル新 332

福音と律法

我々が、神の律法、神の愛を最も明瞭に見ることができるのはどこであろうか？

「我々は律法について語る時、御父とみ子を共に崇めるのである。御父は我々に律法を与え、み子はそれを大いなるものとし、栄えあるものとするために死なれた。」（MS 5, 1885 年）スタディバイブル新 332

「イエス・キリストの義をつかまない限り、エホバの律法を高めることは、我々には不可能である。」（MS 5, 1889 年）スタディバイブル新 332

「エホバの律法は木であり、福音はその芳しい花、またそこに実る果実である。」（Letter 119, 1897年）スタディバイブル新 332

セブンスデー・アドベンチストは神の律法を宣べ伝えるように召されている!

「ほとんど全世界が背教しているこの時代に、神はその使命者たちがエリヤの霊と力をもって、神の律法を宣べ伝えるようにと召しておられる。キリストの初臨に民を備えて、十戒に彼らの注意を向けたバプテスマのヨハネのように、我々も、『神を恐れ、神に栄光を帰せよ、さばきの時が来たからである』とのメッセージを、明瞭に伝えねばならない。」（SW1905年、3月21日）スタディバイブル旧 1263

「神の律法を拡大し、掲げることが我々の働きである。」（CWE70）

「責任の地位にあるわが兄弟方よ、キリストのみ国の律法に喜んで従うことによって律法を掲げなさい。」（FE 511）

「神はご自分の律法を無効にするため、またその律法に取って替えるためにその恵みを用いることはなさらない。...神の恵みとみ国の律法とは完全に調和して、それらは手と手を取り合って歩くのである。」（AG 10）

「もし、第三天使の使命の霊と力が欲しければ、律法と恵みを一緒に提示せよ。なぜなら、それらは、手と手を取って進むのだから。」（GW 161）

三重の使命と律法

我々の働きは、三重の使命を伝えることだと主の僕は言っている。全世界に宣伝される三重の使命の第一天使の使命は、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」（黙示録 14：7）という叫びである。

それは、神を恐れること－神への畏敬への呼びかけである。神を恐れるとは、その命令を守ることである(伝道 12:13)。さばきの時が来たとの叫びは、律法というさばきの標準があるとの宣言である。それは、悔い改めと救い主イエスへの信仰を促すものである。これがパウロの福音であった（患難下 78、使徒 20:21 参照）。

律法が正当な位置に回復されてはじめてリバイバルがおこる！

「神の律法が、その正当な位置に回復されて初めて、神の民と称する人々の間に、初代の信仰と敬虔のリバイバルが起こり得るのである。」 大争闘下 209

エズラ、ネヘミヤのリバイバルは、実にその例であった。

「エズラは心をこめて主の律法を調べ、これを行い、かつイスラエルのうちに定めとおきてとを教えた。」エズラ 7:10

「 彼らはその書、すなわち神の律法をめいりょうに読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた。総督であるネヘミヤと、祭司であり、学者であるエズラと、民を教えるレビびとたちはすべての民に向かって『この日はあなたがたの神、主の聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならない』と言った。すべての民が律法の言葉を聞いて泣いたからである。」ネヘミヤ 8:8, 9

「あなたの聖なる安息日を彼らに示し、あなたのしもべモーセによって戒めと、さだめと、律法とを彼らに命じられました」ネヘミヤ 9:14

「シナイ山上でキリストによって語られた十の神聖な規則は、神の品性の啓示であって、神が人間の全遺産を管轄しておられるという事実を世に知らせた。人間に提示され得る最も大きな愛を表した十の規則から成る律法は、約束のうちに魂に語りかける天からの神の声である。これを行えばあなたはサタンの主権と支配に屈することはないという約束である。一見否定的に思われるかもしれないが、その律法に否定的な部分はない。それは、行って生きよ、ということに尽きる。」（Letter 89,1898 年）

賛美歌２４１にこう歌われている：

1．みよ、世をこぞり　神にそむく、
　　み名をおそるる　おもいは失せ、
　　正義と愛は　ふみにじられて、
　　罪と快楽は　四方にみてり。

2．神をたのめる　み民すらも、
　　過ぎゆくものに　まどわされて、
　　真理を守る　力は弱く、
　　悪と戦う　備えもなし。

3．さはあれ神に　えらばれたる、
　　聖徒はさめて　朝に夕に、
　　みたまのわざを、ひたすら求め、
　　みくにの春を　のぞみ待てり

4．いのちの神よ、くだりたまえ、
　　せきとめられし　河のみずの、
　　はげしき風に　ついゆるごとく
　　ちからにみちて　くだりたまえ。

「我々は、日曜休業令を無効にするために、最善を尽くさなければならない。これをする最善の方法は、神の律法を掲げ、その神聖さのすべてを目立つようにすることである。真理が勝利するためには、それをしなければならない。」（Letter 58, 1906、CW 98）。

「神の律法を拡大し、高揚するのは我々の働きである。神の聖なるみ言葉の真理が明らかにされなければならない。我々は、聖書を命の法則として持ち上げなければならない。我々は、人々に主なる神が天と地の創造主であり第七日が安息日であることを指し示すべきである。」（CW 70）

「我々は、エホバの律法を高揚するために最善を尽くしているだろうか？」（CW 97）

「．．．忠実な者たちは、彼らの信仰を隠す時ではなく、エホバの律法を掲げるべきであることを感じ

る。」(Mar 239.3)

「目前に迫っている大論争点（日曜休業令の強制）は、神が指名されなかった者たちを一掃するであろう。その時、神は、後の雨のために備えられた純潔な、真実な、清い牧師たちをお持ちになるであろう。」3SM 385(1886)

「我々は、『神の戒めとイエスの信仰』と記された旗を掲げるべきである。神の律法への服従が大論争点である。それを見えなくさせてはならない。我々は、教会員、また信じると告白しない者たちが天の律法の要求を見て従うよう、彼らを覚醒させることにつとめなければならない。我々は、この律法を拡大し、尊いものとすべきである。」 (2SM 403)

指導者が日曜日を勧める時が来るか！

「神の休日を守ると自称する者たちの間に、安息日の改革が必要である。... 安息日の遵守に軽率な者たちは、大いなる損失を招くであろう。」

「主はこの最後の時代に、ご自分の民と自称する者たちと論争される。この戦いにおいて、責任の地位にある者たちは、ネヘミヤがとった態度とは全く反対の方針をとるであろう。彼ら自身が安息日を無視し、軽視するだけでなく、習慣や伝統というがらくたの下にそれを葬ろうとするであろう。教会において、大集会において、公然と牧師たちは、週の第一日を守る必要を民に強力に勧めるであろう。 海と陸の災害が次々と増えるであろう。小さな良心的な安息日遵守者たちが、日曜日を軽視することによって世界に神の怒りをもたらしているとの罪をなすりつけられるであろう。」 (RH March 18, 1884 par. 7-8)

律法への服従と救いの関係

「『先生、何をしたら、永遠の生命が受けられましょうか』。この質問は、パリサイ人たちが、キリストのことばの端をとらえてわなにかけるために、律法学者に言わせたものであったので、彼らは、熱心にイエスの答えに耳を傾けた。ところが、救い主は、議論をしようとはなさらずに、質問した当人に答えをお求めになった。『律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか』とお聞きになった。シナイから与えられた律法を、イエスは軽視していると、なおもユダヤ人は、イエスを非難した。ところが、主は、救われるかどうかは、神の律法を守ることにあると言われた。」(キリストの実物教訓 354)

「律法学者は、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』また、『自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ』とあります」と言った。キリストはそれに答えて、『あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる』と言われた。」(同 354)。

「キリストは、常に、律法は、一つのまとまったものとして神がお与えになったものであることを教えられた。つまり、一つの原則がその全体を貫いているから、一つのいましめを守って、他を破るということは不可能であることを示された。人間の運命は、律法のすべてに従うことによって決定するのである。」(同 355)

「するとこんどは別な欺瞞が持ち出されることになった。サタンは、あわれみが義を滅ぼし、キリストの死が天父の律法を廃止したと宣言した。しかしもし律法を変えたり、廃止したりすることが可能であったら、キリストは死なれる必要がなかったのである。律法を廃することは、罪とがを不滅なものにし、世をサタンの支配下におくことになる。イエスが十字架上にあげられたのは、律法が不変であったからであり、律法の戒めに従うこと以外に人が救われる道はなかったからである。それなのに、キリストが律法を確立された手段そのものを、サタンは律法を廃するものであると言った。この点について、キリストとサタンとの間の大争闘における最後の戦いが起こるのである。」(希望下 289)

今日、救いは十字架の恵みにより、信仰によって与えられるのであって、律法への服従は、救いとは関係ないという風潮がある。服従は信仰の根拠ではないが、救いと大いに関係があることを覚えよう。

我々が覚えておくべき必須の事実：

1. 永遠の生命の条件は、律法への服従である。
2. 人間は律法を守れない。条件を満たすことができない。
3. キリストの徳と恵みによって守ることができる。

「人にはできないが、神にはできないことはない」のである。

最後に、私の大好きな霊感の言葉を引用しよう：

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えるとき、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。」(キリストへの道 10,11) ■

「わたしの保護天使は言った。『神の律法と義の福音からまだ多くの光が輝きでなければならない。メッセージがそのほんとうの姿で、御霊によって述べ伝えられるなら、地上をその栄光でみたすであろう。』」

2MR 58 ; 1888 Mtrls. p.160 ; 3EGW Biography p.380

□一般キリスト教とセブンスデー・アドベンチストの解釈の違い。

□十四万四千のすばらしい役割。

□再臨運動の目的。

□なぜ、アザゼルは罪を負って荒野へ？

アザゼルのやぎ

はじめに、レビ記 16 章から読んでみましょう。ここに大いなる贖いの日、大祭司が雄牛の血と罪祭の血を携えて至聖所に入り、そこでの働きを終えた後、しばらくの間、第一の部屋に留まられ、イスラエルの罪を聖所から取り除き、聖所での働きを終えて外庭へ出てきたことが記されています。それではレビ記 16 章 20 節から読んでみましょう。

> 「こうして聖所と会見の幕屋と祭壇とのために、あがないをなし終えたとき、かの生きているやぎを引いてこなければならない。そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手を置き、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう。すなわち、そのやぎを荒野に送らなければならない。」

再臨運動とアザゼルのやぎ

1844 年の再臨信徒は、このアザゼルのやぎがサタンを象徴していることを理解していました。一般に、アザゼルのやぎはキリストを象徴すると考えられていました。アザゼルのやぎがサタンを象徴しているという見解を初めて出版したのは、クロージャーでした。彼は、後に再臨神学の基礎となった聖所における最後の贖いの働きの持つ重要な意味を、1846 年に初めて書き記しました。1 年後、ホワイト夫人はこう書いています。

> 「1 年以上前、主はクロージャーが聖所の清めに関して正しい光を持っており、彼が 1846 年 2 月 7 日付けの Day-Star, Extra で示した彼の見解を書き記すことは主のみ心であったことが幻のうちに私に示されました。私はすべての聖徒に Extra を勧めるように、主から完全に承認されたと感じています。」Word to the Little Flock, p.12

こうして、アザゼルのやぎは、サタンを象徴しており、聖所の奉仕が終わるとき、大祭司が出て来てイスラエルの罪をサタンの頭にのせ、そしてサタンは荒野へとその罪を負っていくということが再臨信徒、セブンスデー・アドベンチストの見解となりました。. . . .

サタンは理解している

サタンはアザゼルのやぎの処置の重大性を理解しているはずです。

> 「彼（サタン）は、彼の天使たちと会議を開いた。彼は、神のみ子に対して、何も勝利することができなかった。そこで、今度、彼らは、いっそう力をふりしぼって策を練り、彼の弟子たちに向かわなければならなかった。彼らは、できるだけ多くの人々が、イエスによって買い取られた救いを受けないように妨害しなければならなかった。サタンは、こうすることによって、なお、神の統治に反対して働くことができるのであった。イエスからできるだけ多くの人々を引き離しておくことは、彼の利益のためでもある。なぜなら、キリストの血によって贖われた人々の罪は、ついには、罪の創始者である彼の上に負わせられて、彼がその罰を受けなければならないからである。一方、イエスによる救いを受け入れない者は、彼ら自身の罪の罰を受けるのである。」初代文集 303

私たちは、この見解を支持するでしょうか。これを信じているでしょうか。それとも他のクリスチャンの友人から受ける攻撃にあう時、私たちは妥協してしまうのでしょうか。アザゼルのやぎに罪を移すことに関し、悪人と善人の罪に違いがあるでしょうか。型において、聖所から大祭司が出てきて、サタンに罪を負わせた時、彼は悪人と善人の罪の責任を負わされたのでしょうか。それとも、それはイスラエルの罪に限られていたでしょうか。どちらでしたか？――それは、イスラエルの罪のみです。レビ記 16 章で読みましたね。悪人が贖いの日の奉仕に係わることは絶対にありません。

先ほど読んだ引用文にあるように、なぜサタンはできるだけ多くの人がイエスを受け入れるのを妨害しようと必死に働くのでしょうか。なぜサタンは、「どっちみち勝負は負けだ。彼らのこともあきらめよう」とは言わないのでしょうか。「贖われた人々の罪は、ついには、罪の創始者である彼の上に負わせられて、彼がその罰を受けなければならないからである」。一方、イエスによる救いを受け入れない者はどうなるのですか？　彼らは、「彼ら自身の罪の罰を受けるのである」。

. . .

なぜ神の民の罪は最終的にサタンに負わせられるのでしょうか。神の御目的は何でしょうか。アザゼルのやぎの意味するところは何なのでしょうか。大いなる救いの計画の最終場面、クライマックスである聖所における最後の働きを理解するためには、大争闘の始まりまでさかのぼらねばなりません。

アザゼルのやぎについて理解すべきことを理解していないければ、救済のすばらしさを十分に理解できません。ホワイト夫人は、時の終わりに近づくにつれて、私たちは大いなる救済計画の研究を深めていかなければならないと言っておられます。

神の律法が訴えられる

大争闘が初めに起こった天に戻って、神の律法に注目してみましょう。なぜなら、それが大争闘の発端であるからです。証の書を通して示された光によると、サタンは神の律法を平和の敵として訴えました。そして問題は何だと主張したのしょうか。そうです、神の律法です!! サタンは神の律法が問題なのであり、平和を乱したのだと言うのです。サタンは、神を除いては、宇宙で最も知的で、天使たちから愛されていました。サタンは、自らの主張を巧妙に覆ったため、多くが彼の論争に惑わされ、そして忠誠を保った天使たちでさえも、そこに含まれる真の意味を理解できなかったのです。「神の律法は平和の敵だ」と彼は言ったのです。この律法を彼は憎んだのです。神のご品性の写しであった大いなる愛の律法を、サタンは利己的な律法だと主張したのです。サタンは言いました：「創造主は他の者たちからは自己犠牲や自己否定を要求されるのに、ご自分は自己否定をされることも、自己犠牲を払われることもない」と。宇宙の大いなる律法は、愛の律法でした。サタンが自己犠牲と自己否定の原則に反抗し始めて、そこで天に不和が生じたのです。そしてサタンは、罪を神の律法のせいにしました。罪の責任は神にある――それがサタンの主張でした。

サタンは天から追放されました。彼は地へ下って行き、人間が神の律法への反逆に加わると悪魔は再び勝ち誇りました。そして彼は、主にむかって言ったのです。「罪人に赦しの御手を差し延べたければ、律法を変更しなければならない。罪人に赦しを与えておきながら、律法を保つことはできない。それを変更し、私たちも天国へ連れ帰りなさい」。そしてこの古い地球で時が流れ、争闘は激しさを増し、サタンは人類を罪の苦しみと惨めさの深く、さらに深いところまで陥れることに成功しました。そして人類の苦悩と堕落を指し、誰にその責任を押し付けようとしましたか。神です。そしてその時でさえ、その本質を御使いたちは完全に理解することができなかったのです。彼らは知らなかったのです。

大争闘は神の律法をめぐって始まったものでした。サタンは神に罪の責任があり、神の律法は平和の敵であると主張しました。神は悪魔と悪天使たちを一瞬にして滅ぼしてしまうことがおできになりましたが、そうすれば、聖天使たちは愛によってではなく恐れから神に従うことになります。強制することは神の性質ではありません。神がお求めになる唯一の忠誠は愛の忠誠であり、そのためには時間をかけなければなりませんでした。神の愛が証明される必要がありました。律法が実証されなければなりませんでした。この世界だけでなく、全宇宙に、罪の責任はサタンにあることを証明するのに時間をかける必要があったのです。

神はどうやって、律法が愛の律法であることを証明することがおできになるのでしょうか。どのような方法で、律法に表されている神の愛の広さ、深さ、雄大さを示すことができるのでしょうか。律法が訴えられる以前、天には調和がありました。しかし、大争闘が天で起こってからは、神の政府の持続性は神の戒めを明らかにする事、全宇宙に神の律法がいかに美しいものであるかを証明する事にかかっているのです。それは全宇宙が一体となって「わたしは主のおきてを喜び、昼も夜もそのおきてを思う」と喜びの声をあげることができるようになるためです。全宇宙が神の律法の正当なこと、決して罪が律法のせいではないこと、問題は罪の創始者サタン自身にあることを見る必要がありました。

ヨハネの黙示録5章は、主の僕が私たちに研究を勧めている章です。これは地球の歴史を終える働きを担う者にとって大変重要な章です。「わたしはまた、御座にいますかたの右手に、巻物があるのを見た。その内側にも外側に字が書いてあって、七つの封印で封じてあった」(1節)。御座に座っておられる天父の手には、全宇宙の標準である大いなる律法がありました。その右手には火のような律法がありました。旧約聖書の時代には、律法の書を開き、神の代理人として民にそれを読むのが祭司の務めでした。しかし今、それは全宇宙に向けて行われるのです。神のご品性である大いなる愛の律法が挑戦されています。全宇宙の安全は、神の律法に表されている神のご品性、その愛の広さ、深さ、雄大さを示すことのできる誰かにかかっています。誰が神の律法を擁護することができたでしょうか。誰がそれを明らかにすることができたのでしょうか。誰が神のご品性を実証することができたのでしょうか。

神の律法が現される

誰もそれをすることができませんでした。天の住民も、地の住民もできなかったのです。「巻物を開いてそれを見るのにふさわしい者が見当たらないので、わたしは激しく泣いていた。すると、長老の一人がわたしに言った、『泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる』」(黙示録5：4－5)。ユダ族のしし、ダビデの若枝――イエス様です！天父を表すお方、全宇宙の大いなる創造主、天父と親密な関係にあるお方です！彼のみが真に律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとすることがおできになったのです。神の律法は神ご自身のように神聖です。人間は無力です。しかしイエスは、この世界だけでなく、全宇宙に神の律法を啓示するためにおいでになったのです。

彼はどのようにして、それを明らかにすることがおできになったのでしょうか。神の律法は愛の律法でした。愛がそれを満たし、愛がそれを要約しており、愛がその原則でした。それは自己犠牲と自己否定です。それが愛なのです。それは感情ではなく、原則であり、神のご品

性、すなわち自己犠牲と自己否定なのです。そしてイエスは、それを実証するためにおいでになりました。イエスはそれを実行するためにおいでになったのです。

自己犠牲、自己否定の愛

「神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべきこととは思わ」なかったイエスの受肉について考えてみましょう。彼は、被造物である私たちがこの世で失われているときに、ご自身も天を望むことはなさらなかったのです。「おのれをむなし」くされたと聖書は言っています。ある人々は自分の評判について非常に心配します。しかし、皆さん、評判よりももっと大切なものがあるのです。それは極めて重要なもの——品性です。この二つを混同させてはなりません。「おのれをむなしく」、もしくは、英語改訂訳では「おのれを空にされ、人間の姿になられた」とあります。なんという屈辱でしょうか。永遠の神が人となられたのです。人間の堕落した性質をおとりになったのです！人間の姿になられたのです。ああ、なんという謙遜でしょう！

しかし、それだけだったのでしょうか。かいばおけの赤子として表された自己犠牲、自己否定の愛がそのすべてだったのでしょうか。それは、ただの始まりにすぎませんでしたね。彼は人となられ、仕えられるためではなく仕えるために、そして多くの者のために身代わりとなって命を捧げるためにおいでになったのです。「その有様は人と異ならず、己を低くして」と聖書は述べています。神が人性をおとりになるために、ご自身を低くされたのです！そして、それがまるで十分ではないかのように、人としてさらにご自身を低くされました。人類のために物惜しみすることなく、ご自分の命を捧げられたのです。彼は、人の必要を満たすためには疲れを知らないしもべであられました。皆さん、考えてみてください。神が人間の肉体という衣に覆われて人となり、人の必要を満たすためには疲れを知らないしもべであられたのです。彼はご自分をむなしくされました。富んでおられたお方が私たちのために貧しくなられ、サタンに圧制されているすべての者を癒されたのです。彼の生涯中、利己的な行為はひとつもありませんでした。彼はご自身を惜しみなく捧げられたのです。彼は休息を邪魔されてもいらいらなさらなかった、とホワイト夫人は言っています。彼は人類のために、全生涯を捧げられたのでした。

最高の愛のデモンストレーション

イエスは自己否定の道を一歩一歩進んで行かれました。それは何のためであったのでしょうか。神の律法を徐々に明らかにされていったのです。神の律法は利己的な律法だとサタンは主張しました。そうではないということを示すため、イエスはおいでになったのです。贖い主の自己否定の生涯を仰ぐとき、私たちはそこに、神の律法が明らかにされ始めるのを見ることができます。しかしイエスの生涯でさえ、それが完全に示されていません。黙示録5章にこう書いてあるからです。「わたしはまた、御座……の間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た」(6節)。カルバリーです！神の小羊です！掲げられた十字架を仰ぐとき、そしてそこに神の小羊を見るとき、皆さんは何が見えますか？神は私たちに何を見てほしいのでしょうか。神は私たちに、最高の愛のデモンストレーション〔実演、証明〕を見てもらいたいのです。何が愛なのでしょうか。自己犠牲、自己否定の愛ですか？カルバリーは、神の律法の啓示以外の何ものでもありません。「エホバの律法は樹木である。福音は香りを放つ花であり、実である」(セレクテッド・メッセージ1巻、212)。

神であられるイエスが人の姿をおとりになり、それだけでなく、ご自身を低くされ、十字架の死に至るまで服従されたのです。そして私たちの身代わりとして苦しまれ、私たちを愛され、ご自身を私たちのために捧げられ、すべてが成就したことを悟り、「すべてが終わった」「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」と言われたのです。

大争闘の光において、カルバリーは何を証明しているのでしょうか。カルバリーは大争闘について私たちに何を教えてくれるでしょうか。皆さん、何よりもまず、カルバリーは、神の律法が良いものであることを私たちに示しています。もし私たちがカルバリーを愛するなら、神の律法も愛さねばなりません。なぜならカルバリーは律法そのものだからです。それは律法の啓示です。カルバリーは神の律法がいかにすばらしいものであるかを示しているのです。それはカルバリーを仰ぐすべての者が、わたしは「主のおきてを喜び、昼も夜もそのおきてを思う」と言うことができるようになるためであり、それだけでなく、カルバリーと十字架は、神の律法は永遠に変わることがなく、神のご品性を表すものであり、平和の敵ではないことを示しているのです。カルバリーは、サタンに罪の責任があることを明らかにしています。カルバリーは、それまで天使たちが理解できなかったことを明らかにしました。このことは各時代の希望下巻の「すべてが終わった」という章に見ることができます。そうです、カルバリーは御使いたちに初めて完全に何かを理解させたのです。サタンが彼の主張を巧妙に覆ったので、彼らはこの大争闘に含まれるすべてのことを理解できなかったということを、私たちは学びました。彼は自分自身を欺瞞という衣で覆っていたのです！ところが、カルバリーで何が起きましたか？天の軍勢の目に、サタンはどのように写ったのでしょうか。彼の欺瞞は暴露されたのです。

> 「カルバリーの十字架に、愛と利己心が向かい合って立った。ここに両者の最高のあらわれがあった。キリストは慰め、祝福するためだけに生活された。ところがサタンはキリストを死なせることによって神に対する憎悪と言う悪意をあらわした。サタンは彼の反逆の真の目的が神を御座から退けることと、神の愛を現されたキリストを滅ぼすこととにあることを明らかにした。」希望上46

サタン—殺害者

サタンは人殺し〔殺害者〕として表されました（ヨハネ8：44)。いつサタンは殺害者になったのでしょうか。罪が初めてサタンの心に侵入して以来、彼は殺害者なのです。ホワイト夫人は、サタンは自分がどこに押し流されていくのか見当がつかなかったことを述べています。

彼は、心の中に湧き上がってくる不思議な思考と感情の性質を理解することができませんでした。神は、サタンが天から追放される前、永遠の愛がなし得る限り彼にそれを示そうとなさいました。神は彼の身に何が起こるのかを示そうと努力なさいました。悔い改めて、立ち帰るチャンスがサタンに与えられました。しかし、彼はそれを拒んだのです！神は十字架の光において律法とご自分の愛を証明しなければならなかっただけでなく、全く対照的なこと——罪とは何か、ということを示す必要があったのです。それはカルバリーの光にのみ、神の小羊の光にのみ現されており、そこで私たちは罪とは一体何であるかを知るのです。始めから悪魔は殺害者でありましたが、それを証明するのにカルバリーが必要だったのです。

しかし、悪魔と悪天使たちだけが罪を犯したのではありませんでした。カルバリーは罪の責任がサタンにあることを証明したのです。神の御座のせいでは断じてありませんでした。ところが、サタンの反逆に加わった者がありました。カルバリーの光において、私たちは罪がどういうものであるかを見ることができます。

イエスは、ユダヤ人の心の中に神に対するねたみと殺意、そして憎悪が潜んでいることを示そうとされました。彼らはイエスが狂っているのだと言いました。彼らは神の民であることを公言しました。「我々は選ばれた民だ！アブラハムの子孫なのだ。どうしてあなたは、我々がそんなに悪い人々で、心にそんな思いを持っていると言うことができるのか」。それは、カルバリーが証明しています。彼らが十字架にくぎを打っているとき、イエスは何と祈られましたか。「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのかわからずにいるのです」。ここに、生まれながらの神に対する憎悪を現す人間の姿がありました。

主の使いは、私たちに全世界——それは私とあなたを含みます——は神の御子の殺害を問われると言っています。

「…カルバリーの十字架から反映する光に自分自身を見、魂の苦悩をもって自分自身を嫌悪するまでは、誰も神がどういうお方であるかを知らないのである。」（牧師への証 264,265）

稲妻が光り、雷は落ちた
私のために主は怒りのくぎを忍ばれた
そして暗闇の中に私は悪魔を見る
神の御子を木に打ちつけるのを

その怒った顔には憎悪が満ちていた
一体誰がそんなにひどいことができるのか
彼は愛に満ちたお顔につばをかけた
ああ、それは誰なのか、誰なのか
闇は消えた！悪魔が見える！

それは私だった！そうなのだ、私自身だったのだ！
わたしがカルバリーでくぎを打ったのだ！
やっと真理にたどり着いた——
やっとそれを見ることができた

この啓示は、聖霊によってのみ魂に届くことができるのです。それが救いをもたらすカルバリーの光景なのです。私がイエスを殺した。十字架につけた。すみません。皆さん、これが悔い改めなのです。私たちは、悔い改めとは何であるか正しい理解を持っているでしょうか。罪が何であるか正しい概念を持っているでしょうか。正しいことから離れる度に、私たちはそれをほんとうに不愉快で嫌悪すべきものとして見ているでしょうか。

ヨハネの黙示録5章、神の小羊の章を深く研究する必要性をコメントして、ホワイト夫人は次のように書いています。「罪は何であるかということについて、考えが曇らされている者たちは、ひどく惑わされているのである。」（9T 267）

悔い改めはカルバリーの真の光に照らされた時の経験です。それは、神の愛の深さと神の律法のすばらしさが現されているのを見、「神の律法はくすしきかな」と唱えるためだけではなく、それと対照的に、私たちが全く神を愛していないことが証明されるのを見るためのものなのです。カルバリーは、私たちが神を憎んでいることを私たちに証明します。生まれつきの心は神に対する敵意〔憎悪〕なのです。それは私たちが罪を犯すとき、問題となるのは行為そのものよりも心に潜む敵意であることを見るようになるために与えられたのです。

正しいことから離れる度に、私たちの心には神への殺意が存在していることに気がついているでしょうか。私たちが、神の御子を自ら十字架につけてさらしものにするというとき、私たちは真の意味を理解しているでしょうか。皆さん、そこには真の意味があるのです！私たちは神に対する敵意を実行に移しているのです！イエスのお顔につばを吐きかけ、十字架につけたのと同じ敵意です！カルバリーだけが、罪が何であるのかを示すことができるのです。そしてカルバリーだけが、神の律法が何であるかを真に示すことができるのです。カルバリーだけが、人を悔い改めに導くことができるのです。カルバリーだけが救いの道なのです。

それゆえ、人が十字架の光の中に自分自身を見るとき、魂の苦悩のうちに、罪人である自分を忌み嫌うようになるのです。そして、その人は神を認めるのです。その人は神の立場を悟ります。神の側に立って、「神に罪の責任はない」と告白します。サタンにその責任があること、しかも自分自身が大欺瞞者に加わったことを見るのです。

イエスは罪をどう処理されるのか

人が罪を告白して悔い改めるとき、何が起こるのか考えてみましょう。彼は事実、神を擁護するのです。彼は悔い改めて、「神に罪の責任はない」と言うのです。彼がその責任から解放され赦されるために、イエスが身代わりとなって死んで下さった、その血を主張します。

新約聖書における「ゆるし」という言葉は、時折「赦免」という一般的な言い方をされています。ヘブル語とギリシア語の両方において、この言葉は文字通り「引き返す」「追い払う」「解放する」ということを意味しま

す。これは、単純に、人の罪が赦されるとき、イエスの血の功績によって、彼は罪とその責任から解放され、型が示すとおり聖所へ移されるという意味なのです。

ここで、覚えておかなければならない重要なポイントがあります。イエスは罪を消し去るために死なれたのではありません。繰り返しますが、皆さん、イエスは罪を帳消しにするために死なれたのではないのです！「キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった」(あけぼの上 422)。

罪が聖所に移されることによってひとつの手段が与えられました。しかし、イエスの死は罪を帳消しにしませんでした。イエスは、彼を受け入れる者のために死なれたのです。罪人がサタンの反逆に加わるその責任から彼を解放するために、イエスは罪人の身代わりとなられたのです。こうして罪は罪人から消し去られるのではなくて、聖所へと移される道が開かれたのです。

私たちが、贖いのことを思うとき、イエスが罪のための贖いをなされたというよりは、罪人のための贖いをなされたと言う方が正しいでしょう。証の書の中には、イエスが罪のために贖いをされたという箇所がいくつか見つかります。それは、お風呂のお湯が沸いているときに、「風呂が沸いている」と言うのと同じようなことなのです。イエスは罪人を解放するために贖いをなされましたが、罪を帳消しにするために死なれたわけではありませんでした。罪はサタンから起こりました。イエスは目的を持っておられます。彼は私たちの罪を買い取られました。その責任を負われました。そして罪を聖所に置き、そこを離れられます。私たちはこれから、彼が聖所での働きを終えられるとき、その罪をどうなさるかを見ていきたいと思います。

私たちは、罪が悔い改めた罪人にとって何を意味するかを理解することができました。「神に罪の責任はない」と事実上言うことであり、その責任は聖所へと移されます。それはサタンのために保管されているのです。彼はサタンにその責任があり、神の律法の麗しきことを告白するのです。

さて、悔い改めに至らなかった人はどうなるのでしょうか。エデンの園へ戻って、悔い改めを欠いた最初の罪人のことを考えてみましょう。神はアダムに、「あなたは何をしたのか」と言われました。アダムは、「あの女が…」と言いました。誰が女を造ったのですか？神は女に向かって、「あなたは、なんということをしたのです」と問われました。すると女は、「へびのせいです。あなたがへびをお造りになるから…」。罪を悔い改めることができない人、状況のせいにする人、気分をコントロールできずにその妻を責める夫、罪の言い訳を探す人、それが何であっても、実質上は「神のせいだ」と言っているのです。彼の心の中に潜む反逆を認める代わりに、彼は怒りの日のために神の怒りを積んでいるのです。彼はカルバリーの光を見ることを拒み、「神のせいだ」と言うのです。

カルバリーとイエスの生涯は、人が陥るどんな状況も罪の弁解とはなり得ないことを証明しています。罪に言い訳はありません。もし罪の言い訳が成り立つとすれば、神はそれによって訴えられることが可能でした。律法は実に平和の敵であり、サタンが正しいということになるのでした。自己弁護の精神と悔い改めを怠ることは、神に対する反逆です。それはイエスによって、神の御子の尊い賜物によって罪の責任をサタンに負わせることを拒み、その責任を自分自身で負うことを選んでいることになるのです。これが、悔い改めを怠るすべての人のしていることなのです。

イエスが世の罪をご自分の身に負ってカルバリーで死なれたとき、彼は、ご自身の血によって得られた私たちの永遠の救いを携えて天の聖所へお入りになったのです。彼は天の聖所で何をなさっていたのでしょうか。罪人らが十字架のもとへ導かれるように、父のみ前に捧げられる彼のとりなしの祈りと、世に命のパンと神の霊とを送ることによって、彼はカルバリーの十字架の上に光を輝かされるのでした。

1800 年もの間、イエスは天の聖所の第一室における奉仕を続けられました。人々が聖所の光に反映する十字架の光を仰ぐとき、彼らは十字架のもとに集まり、罪の赦しを受けるのでした。彼らの罪は赦され、聖所に移されるのでした。時代から時代にわたって、「サタンが罪の責任者である」と言って罪を告白し、それが聖所に移され、主キリスト・イエスにあって死んでいった人々が何千何万といました。彼らの罪は赦されました。つまり、「もとの所に戻され」「追いやられ」たのでした。

至聖所の働き

1844 年に、いまだかつて起こったことのない事件が天で起こりました。イエスが至聖所に入られたのです！ダニエル書 8：14 の預言によると、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に服する」ことになっています。ここで「清められる」と訳されている「sadaq、サダク」という語は、聖書の他のどこにも用いられていません。それは霊感による新語なのです。なぜでしょう。それは新しい働きを意味するからです。1844 年に始められた特別な働きを表現するために、特別な言葉が用いられたのです。

1844 年までは、イエスを受け入れた人に罪の赦しが与えられました。彼らには仲保者がおられ、彼らはイエスのもとに来て義認を受け、クリスチャン生活を続け、もし再び彼らが罪に陥るようなことがあっても、イエスのもとに帰り、赦されることができました。悪魔が彼らを罪に陥れても、天の聖所にはその義の衣で彼らを覆って下さるイエスがおられるのでした。しかし、第一の部屋で奉仕をしておられる間は、イエスは二度目においでになることができないのでした。イエスが第一の部屋での奉仕を続けておられる間は、サタンがこの世から追放されることはないのでした。1844 年にイエスは新しい働き、聖所の清めの働きを始めるために第二の部屋にお入りになったのです。

サタンは神の永遠の計画を憎みましたが、カルバリーは神の御目にはサタンの敗北であり、それはサタンの性質を暴露しました。けれども、サタンはまだこの大争闘を続ける気でいました。彼は再び神に挑戦して言うので

す。「イエスが私を打ち負かしたことは認めよう。イエスは神の律法に生き、それを守られたことは認めざるを得ない。しかし、そのように行う人間は一体どこにいるのか。カルバリーを受け入れ、赦しを得た者はいるが、あなたは彼らの衣をご自分の義で覆っておられるではないか。そして彼らは度々罪を犯しては、堕落するではないか。イエスのように神の律法を完全に守る人々はどこにいるというのか。」イエスは仲保者なしにこの地上で生涯を送られました。彼の欠点を覆ってくれる人はいませんでした。サタンは言うのです。「あなたは、聖所であなたの民の失敗を覆っておられるではないですか」。そしてさらに、「私はまだ敗北していない！」と。そこで神はサタンに言われます。「よかろう。あなたの言うことにも一理ある。では、私はイエスのように生きる人々を生み出そうではないか。地上の最も堕落した時代に、恵みによってこれらの人々を生み出そう。私は彼らを罪から完全に引き離そう。彼らはイエスのかたちを完全に反映するであろう。私は聖所から出て、彼らは仲保者なしに聖なる神の御前に生きるのだ！」

そのような人々が生み出されるとすれば、全宇宙は驚嘆することでしょう。彼らを通してサタンは永遠に打ち負かされ、聖書が十四万四千と呼ぶこれらの特別な人々によって、神の律法に対する疑問のすべてが答えられるのです。十四万四千が生み出され、現されるために、そして彼らが生ける神の印を受けることができるようになるために、イエスは1844年、最後の贖いをするために天の至聖所にお入りになったのでした（初代文集410－413参照）。これは特別な働きです。古代イスラエルにおいて、贖罪の日、イスラエルの全会衆は深く魂を悩ませ、心を探りながら聖所の周りに集まり、大祭司はそこに入って彼らの罪を取り除き、イスラエルに罪の終わりを来たらせたのでした。聖書にはこう書かれています。「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」(レビ記16:30)。型において、民を清めるという働きを完成させた後、大祭司は第一の部屋に入って罪を取り、出ていってアザゼルのやぎの頭に罪を載せました。そして「定めておいた人」、それをすることができる人、そうする備えのできている人が、アザゼルのやぎを荒野へと引いて行ったのでした。

私たちは実体である贖罪の日に生存しています。イエスは私たちの罪を取り除くため、最後の贖いをするために至聖所におられます。イスラエルはこの聖所の周りに集まり、すべての罪が赦されて聖所に移され、すべての罪から離れた状態で心を悩ましていなければならないのです。何が魂にこの苦悩をもたらすのでしょうか。人を深い悔い改めに導き、罪が本当に何であるのかを示すものはただひとつしかありません。何ですか？そうです。カルバリーの十字架の光です。

イエスは至聖所にお入りになり、第二の部屋の扉が開かれました。私たちが聖所の荘厳さの中に神の大いなる裁きを見、神の律法とカルバリーの十字架の真の意味とをそこに見出せるように、至聖所からは光が流れ出ていました。カルバリーは至聖所の光において完全に明らかにされるのでした。私たちは罪を赦され、クリスチャンの道を歩んではいるものの、人間の心の奥底にはまだ隠れた罪が残っているということを知る必要があります。サタンがこの世界から追放される前に、彼は神の民の生活から完全に追放されなければなりません。すべての隠れた罪が示されなければなりません。働きは終了しなければなりません。贖罪の日におけるユダヤ人のように、聖所の周りに集まるようになるために、神の民は、カルバリーとそこで掲げられた救い主についてのこのような洞察を持たなければなりません。イエスは彼らのために何をなさるのでしょうか。イエスは、彼らの罪を取り除かれるのです。

証の書は、罪の除去の意味するところを明白に示しています。私たちは、神の民が聖所の周りで彼らの魂を悩ましているとき、サタンが彼らの汚れた衣ー彼らの汚れた品性ーを指摘すると言われています（国と指導者下193,194）。サタンは彼が試み、陥れた彼らのあらゆる罪を指摘します。しかし、聖所の周りで魂を悩ましている民のためにイエスが裁きに立ち上がられるとき、彼は、「汚れた衣を脱がせなさい」と命じられるのです。イエスは彼らの罪を取り除かれ、魂の宮におけるすべての罪の影響から彼らを永遠に清められるのです。これが最後の贖い、罪の除去、聖所の清めが行われる理由なのです。それは単に天における清めの働きだけではなく、神の民の生活から罪を取り去り、罪の支配から永遠に解放することを意味するのです。それを、イエスは裁きの日に行って下さるのです。彼は、彼の民の罪を除去するようお命じになり、そして彼らは使徒行伝3章19節にあるように、後の雨を受けます。「だから、自分の罪を拭い去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである」。

主のみ前から慰めの時が来るとき、神の民は印されるのです。最後の魂が印され、恩恵期間が終了するその時、イエスは香炉を投げ捨てて「事はすでになった」とおおせられます。そして、神の印を受けたすべての者は、イエスのみかたちを完全に反映するのです。神は彼らを指しておおせになることができます。「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰をもちつづける聖徒たちがいる」と。彼らはすべての罪から清められています。彼らは、麗しいイエスのみかたちを完全に現しています。彼らにはしみも、しわもないのです。

印する働きを終えられ、神が6000年間待望し続けられた人々を生み出された私たちの仲保者、大いなる大祭司は、「天の聖所の第一室にちょっとの間とどまられた」(初代文集452)とあります。

聖所の儀式は私たちに、罪が祭壇に置かれて聖所へと移され、それからイエスが罪を携えて天の聖所の入り口に来られることを教えています。彼はそれをサタンの頭に置かれます。皆さん、これらはイスラエルの罪であり、今日述べられているように悪人と義人両方の罪ではないのです。悪人は自らの罪をすべて負わなければならないのです。これは調査審判において除去されたイスラエルの罪であり、イエスはこの罪をアザゼルのやぎの頭に置かれるのです。

アザゼルのやぎの重要性

Spaulding-Magan collection（スポールディン・マガーン集）の２ページ目よりE.G.ホワイトの引用文を読んでみたいと思います。

> 「それから私は、聖所におけるイエスのお働きが間もなく終わるのを見た。そして、そこでの働きを終えられると、彼は第一の幕屋の入り口に来られて、アザゼルの頭の上にイスラエルの罪を告白なさる。それから彼は、報復の衣を着られるのである。それから悪人の上に災害が降りかかるのであるが、イエスがその衣を着られ、大いなる白い雲の上にご自分の居場所を移されるまで、それらの災害がやってくることはない。それから災害が降りかかっている間、アザゼルは荒野に追いやられる。彼は懸命に逃れようとするが、彼を追放する者の手にしっかりと捕らえられている。もし彼が逃げようものなら、イスラエルの生命は絶たれてしまったであろう。」

サタンは大争闘のすべての場面において神に挑戦してきましたが、イエスが聖所から出てこられてサタンの上に罪を置かれるとき、神は彼に言われます。「サタンよ、あなたに罪の責任はあるのだ。これらの罪は聖所に移されていた。私は、私が贖った者たちをそれらの罪から解放するために命を捨てた。サタンよ、思い知るがよい。あなたがこの事の発端である。それゆえ、これらの罪をあなたが負いなさい」。勿論、サタンがそれを快く思うはずがありません。それらの責任を負いたくないので、彼はそれを行われる神の権利に挑戦します。しかし神は、贖われた者たちの罪の責任がサタンにあり、また反逆し続けることを選んだ悪人たちの罪は負う必要がないことを証明することがおできになります。どのようにして証明なさるのでしょうか。ここに、この地上ですべての罪が取り除かれ、永遠に印された人々が初めて存在するようになるからです。神は全宇宙に向かって、「ここに罪から完全に解放された人々がいる。彼らは二度と罪を犯さない」と言うことがおできになるのです。そして、至聖所における働きが終わると彼らは二度と罪の道に戻らないということ、彼らが罪を取り除かれると、もう二度と罪に触れることがないという事実によって、サタンの責任が証明されるのです。しかし一方では、どんなに小さいと思われる事であっても、もしサタンが彼らを善から引き離すことができれば、彼の言い分は通るのでした。

十四万四千——定められた人

大祭司がアザゼルのやぎの上に罪を告白したわけですが、そのやぎを荒野へ引いて行く人、そうすることができる人——「定めておいた人」がいなければなりませんでした。やぎを連れて行くことができる、それにふさわしい強力な人物が必要でした。アザゼルのやぎを引いて行ったのは大祭司ではありませんでした。やぎがひとつの場所につれて行かれるのは、予型においてだけでした。実体においては、それは彼をある状態に導くのでした。それは闘いでした。連れて行かれる間、アザゼルのやぎは必死に逃れようと努力します。災害が臨んでいる間、サタンの全エネルギーは、十四万四千の聖徒らに向けて費やされるのです！

イエスが聖所から出られて働きを終えられるとき、彼はサタンに言われます。「サタンよ、ここに私の民がいる。彼らはあなたの手中にある。あなたの好きなようにするがよい。ただ、彼らの命を奪ってはならない」。まるで神が聖徒たちからみ顔をお隠しになり、彼らの祈りは聞かれていないように思われます。神のご臨在から締め出されたように感じられ、そして事実、聖所には仲保者がおられないのです。サタンはこの世の指揮権を完全に掌握し、すべての悪人で組織される暗黒軍を率い、前衛は神の民を倒すために向かってきます。しかし、サタンはしっかりと取り押さえられているのです！　ああ、もしサタンが十四万四千を罪に陥れることができるなら、そのうちの一人にでも神の律法を犯させることができるならば、サタンは勝利するのです。

主は言われます。「わたしはわがしもべ、枝なる十四万四千を生じさせる」と。定められた人は、イエスの力によって勝利することができます。なぜなら、彼らは倒れることがないからです。彼らは決して屈しないでしょう。

これが最後の大いなる霊の戦いにおいて像の足を打ち砕き、サタンの権力とこの世の王国とを打ち砕く、ダニエル書２章の石なのです。そこにはこう書いてあります。「それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます」(44節)。像の足を打ち砕き、サタンを打ち負かす王国、それが十四万四千なのです。十四万四千において、イエスは大争闘に勝利なさるのです。

それはイエスとサタンとの激しい戦いです。かつてこの地上において、イエスとサタンの個人的な戦いが行われました。災害の期間中に再びそれが繰り返されます。しかしその時には、イエスは十四万四千の経験において戦われるのです。彼らが罪を犯すことなく神の律法を完全に守るという事実によって、サタンは打ち負かされ、彼の訴えは敗北に終わり、彼はしっかりと取り押さえられるのです。

十四万四千に賭けられている

私たちは、救済の計画が完全な成功であることを神は天使たちに保証しなければならないという観点から、この儀式を見ることができます。各時代の贖われた者たち、すなわちイエスにあって死の眠りについた者たちは、二度と罪を犯すことがないということについて、天使たちはどのような確証を持っているのでしょうか。それはかつて証明されたことがありません。ある人々は臨終の床においてイエスを受け入れましたが、もし彼らの寿命が１年延ばされたとしたら、彼らは再び罪の生活に戻ったかもしれません。彼らが罪深い生活に戻らないという保証はあるのでしょうか。罪が除去されれば、イエスの血が永遠の罪の防御となる保証はあるのでしょうか。

航空会社が新しい飛行機を製造したとしましょう。旅客を乗せる前にしなければならない当たり前のこととは何でしょうか。勿論、テストすることです。彼らは普通の状況で要求されるよりも簡単なテストをするでしょうか、それともさらに厳密なテストをするでしょうか。厳密なテストですね！

ですから神は、全宇宙にこの保証をお与えになるので

す。イエスの血が罪の永遠の防御であることを、神は証明なさいます。生ける聖徒らの罪を除去された後、神は彼らをサタンの手に渡され、彼らが極限まで試みられることをお許しになります。神は、サタンが仕掛けることのできる最も落胆させる、最も恐ろしい試練の中に彼らを置かれます。そして彼らは、救いの計画が成功することを証明するのです。

しかし、もしアザゼルのやぎが逃れることができれば、十四万四千だけでなく全イスラエルが失われるのです！皆さん、神の御座を確立する民を神は待ち望んでおられます。それは人間の目には、まるで神がその御座の権威を危険にさらしておられるように写ることでしょう。しかし、神はすべてをご存知です。神はすべてを十四万四千に託されるのです。もしアザゼルのやぎが逃げてしまえば、イスラエルは失われます！救いの計画の失敗が証明され、サタンは神の民の罪を負って最後の刑罰と滅びに臨まなくてもよくなるのです。

何と大きな責任が十四万四千に負わされていることでしょう！なるほど、ヤコブの悩みの時に彼らは救出を叫び求めるはずです！証の書には、悩みの時における彼らの大いなる苦悩は、生命の危険によるものではないことが書かれています。彼らは死も拷問も恐れません！彼らは永遠の生命さえも喜んで犠牲にする境地にまで到達します。彼らはイエスがなされたように、すべてを犠牲にするのです。彼らは彼らのために天に用意されている場所を喜んで捨てる気持ちがあります。しかし、彼らがヤコブの悩みの時に恐れることがひとつだけあります。――さて、何でしょうか。彼らは、万事が彼らにかかっていることを悟るのです。彼らは、自分たちが神の御座の名誉を汚す可能性があることをはっきりと理解します。十四万四千が小羊の行くところへはどこへでもついていく理由がここにあるのです。これこそ、この一団が他の人々よりもさらに満ちたイエスの経験を味わう理由なのです。ヘブル 11 章 40 節では、墓に休んでいるすべての聖徒たちについて次のように言われています。「神はわたしたちのために、さらによいものをあらかじめ備えてくださっているので、わたしたちをほかにしては」何ですか？「彼らが全う〔完全に〕されることはない」。

十四万四千が現れない限り、義人の復活もあり得ないのです！義人たちは彼らの墓に横たわり、最初の実〔初穂〕が熟するのを待っています。救いの収穫が行われる前に、最初の実が熟さねばなりません。殉教者と贖われた者の血が、彼らの墓から神に叫びます。「主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」と。神のご品性を擁護し大争闘のすべての謎を解く者、サタンを打ち負かし、アザゼルのやぎを引いて行くことのできる神の教会を彼らは待ち望んでいるのです。彼らは、サタンの働きを打ち砕き、もみがらのように散らす石を待っているのです。彼らは墓に眠り、十四万四千の出現という素晴らしいデモンストレーションを待ち望んでいるのです！

再臨運動の目的

生ける神の印を受けるべき民をバビロンから召集するという明確な目的のために、神は 1844 年に運動を起こされました。1844 年に神が運動を起こされたのは、他にも存在する多種多様な教会に並んで、単に別の教会を起こすためのものではありませんでした。十四万四千の特別な働きは、生ける神の印に人々を備えさせることです！初代文集 221 ページで第三天使は「印をおし、束ねる」天使として表されており、その使命は、天に移される備えを人々にさせるものです。それを終えるまでは、働きを終えることができないのです。これこそ、神がイエスのお働きによって私たちにお与えになった特別な任務なのです。その働きとは、皆さん、罪に終わりを来らせることであり、そうすることによって、神は私たちに大きな責任を委ねることがおできになるのです。

もし主が私たちのところにおいでになり、「さあ、わたしは今夜この責任をあなたに負わせよう」と仰せになるとしたら、私たちはそれを喜ぶことができますか？私たちは、きっと尻込みしてしまいますね。私たちは準備ができていないのです。神があれだけのことを私たちにお任せになる備えが、私たちにはできていると思われますか？贖われた者たちは墓の中で待っています。それは神も待ち望んでおられることです。神は、この特別な働きを担うことのできる人々を待っておられるのです！私は時々、私たちが第三天使の使命の目的を見失っていると感じることがあります。神は、人をただ死に備えさせるために運動を起こされたのではありません。1844 年とそれ以前の教会は人を死に備えさせるためのメッセージを持っていましたが、人々に生きて主を迎える備えをさせるためのメッセージは持っていませんでした。皆さん、この事実に直面すれば、私たちがどれだけゴールを見失っているか分かっていただけるでしょう。私たちが今まで通りの道をたどり続けるとすれば、サタンは絶対に引いて行かれることもなく、働きが終わることもないのです！

イエスは 3 年半における公生涯の間、悪魔と戦われました。カルバリーで十字架にかけられる時が来たとき、サタンはイエスに言いました。「どうしてカルバリーに行かれるのですか。あなたは素晴らしい働きをなさっています。福音をまだ必要としている人々をご覧なさい。まだ始まったばかりじゃないですか。あなたのご奉仕はやっと定着し始めたところですよ。どうして、今、働きを無駄になさるのですか。このまま続けさえすれば、あなたは素晴らしい働きを成し遂げることができます」。彼のイエスに対する努力は実りましたか？イエスは断固としてエルサレムへの道を進まれました。彼は天父の御目的を知っておられたので、その働きを成し遂げるために進んで行かれたのでした。

しかし、イエスに対するよりも、悪魔は私たちに対してはもっと成功を収めているのです。彼は私たちの側に来てほめのかします。「あなたはこの世で素晴らしい働きをしている」。それも間違ってはいません。イエスもこの世で素晴らしい働きをしておられましたね。悪魔は間違った状況において真理を語り得るということが、ここでお分かりになると思います。「あなたは学校や病院を設立し、施設や教会を建てているではないか」――そしてそれも良い事であって、どれも必要な働きです。「ただあなたの働きを同じやり方で続ければ良いのだ」と悪

魔はささやきます。至聖所でまだ完成されていない働きから、何であっても―いいですか、何であっても、私たちの目をそらすものがあってはなりません。私たちが裁きにあずかり罪が取り除かれ、生ける神の印を受けることができるようになるために、断固として聖所に入らねばなりません！このような勝利が、至聖所において神の民を待っているのです。

イエスは言われます。「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門〔扉〕を開いておいた」。扉は開いており、後の雨を待つばかりです。それは教会がそれを求め、受け入れるのを待っているのです。イエスは罪に終わりを来らせようと待っておられます。扉はこの経験のために開かれており、私たちが贖いの日の条件を満たしてそこに来るならば、イエスはそのお働きをすることがおできになるのです！皆さん、もし神の民が、断固として聖所への道を進むならば働きは終わるのです。しかしサタンは私たちをその道からそらし、私たちはその働きを終えるという幻を捕らえていないのです。

どうか、私たちが第三天使の使命の目的を理解し、イエスが何を成し遂げようと待っておられるのかを知り、十四万四千と呼ばれている特別な一団に数えられるよう、イエスの憐れみにより力の限りを尽くすことができますように。■

ロバート・ブリンズミードの説教より

鎌田幸江訳

北アメリカ支部の嘆かわしい現状

「北アメリカ支部は、なお発展していると見えるが、数によって欺かれ、また結論を下す事があり得るのは確かである。しかし、成長はしていないのである。信頼すべき筋によると、わが教会の信者の３０～４０％はもはや教会に出席していない。出席率の低下に比例して献金も低下している。急激な教会の予算削減も認められている事実である。教会学校への学生数も低下している。いくつかの機関が閉鎖している。教会の操業、対策も削減している過程にある。書籍のマーケット(売買需要)も縮小している。教団の月刊雑誌も合併したが、その配布は減少している。ほとんどのカンファレンスで聖職者を縮小しなければならないほど、経済的に規制する時がきた。これらの現象は神学的な分野で起こったことの必然的な結果である。．．．

リベラル主義が、神の都の城壁の中に知らぬ間に侵入してきて、いろんな形で教会の門から入るのに成功している。例えば、多元主義（あれもいい、これもいい）、世俗主義、ヒューマニズム（人道主義）、物質主義、未来主義、過去主義というものが共存するようになった。」サムエル・コランテン・ピピンの Receiving the Word p201

赦しを失った男

法廷は静まりかえった。全員は裁判官の判決を聞こうとかたずをのんでいる。法廷で裁判官に面して立っている一人の男。

それは、ジョン・ハンセンであった。無差別殺人罪で訴えられている。どのような判決が下るのであろうか？

裁判長は、小槌で机をたたいて、咳払いをした。「この法廷はジョン・ハンセンに殺人犯として死刑の判決を下す」。

彼は死刑を言い渡された。まだ若いこの被告は、法廷を出て、死刑囚監房に連れて行かれた。ジョン・ハンセンは、もはや社会を脅かすことはない。数日の間、ちまたでは、この判決の話で持ちきりとなった。そのような刑罰は当然だと誰もが思った。

しかし一人、もしジョン・ハンセンにもう一度チャンスが与えられたらきっと彼は人生をやり直すだろうと思っている者がいた。彼は小さい時から、ジョンをよく知っていた。神に背を向けだんだん犯罪の淵に落ち込んでいった事情を全部知っていた兄、ホワード・ハンセンであった。彼は愛するジョンの人生がこれで無駄に終わるのかと思うといたたまれなかった。どうにか助けて立ち直らせる方法はないかと、日夜思案した。

とうとう、彼の親友が知事であるから、彼の好意を得ようと思い立った。これまで彼に頼み事をしたことはなかったが、今となってはためらってはいられない。

知事のオフィスに入った。知事は黙って、ホワードの話を聞いていた。ついに口を切って言った「君の弟が変わるという保証はあるのか？刑務所を何回出入りしているか、君はよく知っているだろう。強盗から、そして今回の殺人罪。彼が刑務所を出て国の法律を守る人間になれると思うのかね。この恐ろしい犯罪人を街路に放り出してくれとどうして言えるのか？次、誰の命がねらわれるのか、不安でたまったもんじゃないよ。」

ホワードは沈黙を保っていた。知事が言うのは、すべてもっともであった。しかし、弟のことはあきらめることができない。「頼むから、ジョンのために恩赦状を書いてくれ。私が彼に会う。もう一度やり直すという証拠を見たら、それを渡す。もし悔い改める様子がなかった

ら、決して渡さないと誓うよ。」知事はホワードを信頼して恩赦状を書いた。

喜び勇んで兄は、恩赦状をポケットに入れ、刑務所を尋ねた。しばらくして許可が出て、面会した。ガラス越しに話す。ホワードは、重い心で愛をもって弟の目を見つめて話しかけた。しかし、ジョンは、呪いの目つきでにらみつけ、背を向けた。「待ってくれ、ジョン。大事なことを君に聞きたい。もし、恩赦を受けたら、君はどうする？」

ジョンは、目を細めて、歯ぎしりしながら、「こうするよ。まず俺を有罪にした裁判官の首をふっとばす。それから、俺を有罪に追い込んだ証人を殺してやる」。

ホワードは、ショックでしばらく座り込んだ。まさか本心から言っているとは思いたくなかったが、本心であることが分かった。立ち上がって、最後のさよならを弟に言ってそこを去った。助けに来たのに受け入れてもらえなかった彼の心はうちひしがれた。

恩赦状は、彼のポケットには入ったままであった。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。」イザヤ 55:6、7

「あなたは彼らに言え、主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたはどうして死んでよかろうか。」エゼキエル 33:11

anchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoranchoran

ふたたび神の宮となるために

「神が道徳律の創設者であると同じに肉体の法則の創設者でもある。」

食事と食物に関する勧告 11（以下 CDF とする）

鍋島幸保

神様はなぜわたしたちに健康の原則を与えられたのでしょうか？　「愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ健やか(健康)であるようにと、わたしは祈っている。」（3 ヨハネ 2）とあるように、それは、わたしたちの幸せのためです。さらに、「どうか、平和の神ご自身があなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊とこころとからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように。」（1 テサロニケ 5:23）とあるように、わたしたちが清められて神のみかたちを回復するために与えられたのです。健康の原則、自然の法則は、わたしたちが健康な肉体を得てこの世において命を保つためだけではなく、魂の健康を保ち永遠の命を得るために必要不可欠なものなのです。

つい最近までわたしは、自分の日常生活と霊的生活の間に関係はないと思っていました。つまり、自分が何を食べようが、飲もうが、聞こうが，見ようが、何をしようが自分と神様の関係に影響を及ぼさない！と、思っていたのです。ですから、自分の好き勝手に生活しながら、週に一回教会に行って礼拝に座っていて、それで自分はクリスチャンだと思っていました。でも、イエスさまと個人的な関係を持っていなかったため、何をしても満たされず、自分には何か足りない．．．といつも心の中にぽっかりと穴があいてました。さらに、体のあちこちが故障していましたので、心と体は何て密接につながっているんだろう．．．と深く感じていました。しかし、「霊とこころとからだ」、この 3 つが密接につながっていることには気づいていませんでした。将来に不安をおぼえ、満たされない心と病んだ体を抱え疲れきっていたとき、イエス様は「わたしのもとに来なさい。あなたを休ませてあげよう。」といって、もう一度わたしを呼んでくださったのです。それがちょうど 2 年半前でした。自分が体や心だけでなく、何より罪という魂の病におかされていることにはじめて気づきました。そして聖書の中にあるすばらしい真理に触れて、神様こそが唯一の癒し主であることを経験したとき、大きな喜びにみたされました。また健康の原則を教えられ、少しずつ生活が変わるにつれて、体の調子も徐々によくなり、心の穴は埋められ、何より魂に平安が与えられました。健康の原則とは、心と体と魂のためにあるものだとはじめてわかりました。肉体の法則に従うことによって魂が元気づけられ、魂の法則に従うことによって体が元気になっていったのです。

健康の 10 原則には、肉体的側面と霊的側面があります（p19 の図表参照）。たとえば、わたしたちの生命を維持するために呼吸はなくてはならないものですが、同じように霊的生命を保つためにも呼吸が必要です。「祈りは魂の呼吸である。」（あけぼの上 82）と、あるように祈りがなければわたしたちの魂は窒息死してしまいます。神との交わりである祈りは、決まった時間だけでなく常に必要なのです。また、日光はあらゆる意味でわたしたちの体に大きな恵みを注いでくれますが、同様に義

の太陽であるイエスさまを仰ぎ見ることで、わたしたちは魂の生気を養い、キリストが世の光であられたようにわたしたちも彼の光を反射して世に輝くことができます。この10原則はわたしたちの肉体にとっても霊にとっても、生きるためになくてならないものなのです。そして、これらはわたしたちの内に神のみかたちが回復されるための具体的方法、つまり品性完成の道をたどるガイドラインなのです。

「輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住される宮となることが、永遠の昔から神の目的であった。罪のために人類は神の宮とならなくなった。人の心は、悪のために暗くなり、けがれたものとなったので、もはや聖なる神の栄光をあらわさなくなった。しかし神のみ子の受肉によって天の神の目的は達成された。神は人類の中にお住みになり、救いの恵みを通して、人の心はふたたび神の宮となる。」（希望上186）

人間は神様の栄光をあらわすために、神の宮として創造されましたが、罪のために人の心は汚れたものになってしまいました。しかし、イエス様が心の内に住んでくださることによって、わたしたちはふたたび神の宮となることができます。イエス・キリストの清めの力によって、わたしたちは神の宮として回復されるのです。

「人類を創造された神の御目的が実現されるように、人に創造主のみかたちを回復し、人を創造当初の完全な姿にもどし、知、徳、体の発達を促すこと、これが救済の働きとなるべきであった。これが真の教育の目的であり、人生の大目的である」（教育5）。

「聖所は清められて、その正しい状態に復する。」（ダニエル8:14）とは、わたしたちが神の宮、聖所として清められ回復されるための、天の至聖所におけるキリストの働きを示しています。

「衛生改革は第三天使の使命の一部であって、腕や手が人体と密接につながっているように、これらも連結している。」（1T486）

健康改革のメッセージと聖所の教えは切っても切れない関係にあります。なぜなら、そのどちらもわたしたちが、神の宮として回復され神の栄光を表すために非常に大切なメッセージだからです。聖所のステップをとおして、また健康の原則をとおして、わたしたちは神様がわたしたちに望んでおられることを理解する事ができます。

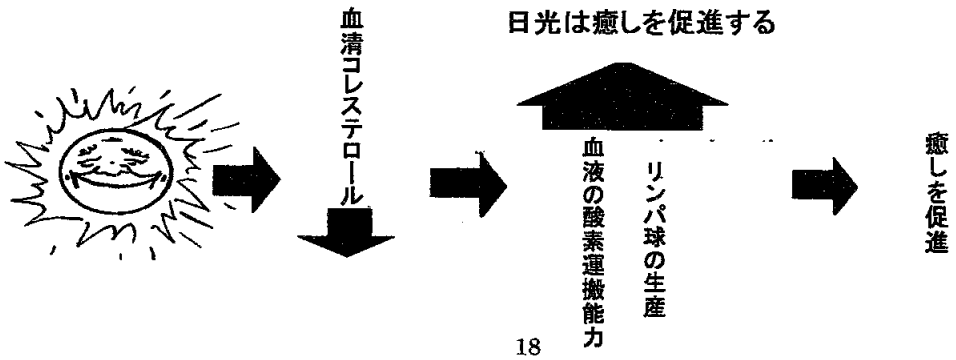
「飲むにも食べるにもまた何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。」（1コリント10:31）

「人は神の宮、神の栄光のあらわれる住み家とならなくてはならないとの知識が、わたしたちの体力を守り、また、それを発育させていくうえに最高の動機とならなくてはならない。」（ミニ247）

神の栄光とは神のご品性をあらわします。わたしたちは、何事をするにも神のご品性をあらわすために生きることを日々選んでいるでしょうか。

近年、日常生活の刺激が脳に様々な影響を及ぼすということが、徐々にわかってきました。とくに、食事が脳に与える影響はわたしたちの考える以上のものです。アメリカのある小学校で、このような実験がされたそうです。授業中落ち着かず、問題行動が多い子どもたちを、何とかできないものかと、学校をあげて対策を考えました。そして、食事改革をすることにしたのです。ファーストフードばかりを食べている子どもたちに、きちんとした食事をさせようと、昼食の内容を変えることにしました。しばらくして子どもたちの成績をしらべたところ、以前よりも上がっており、授業中も落ち着いた態度になった子が増えたそうです。また、カルフォルニアのある刑務所では、菜食とそうでない食事の2種類を選べるようになっているそうですが、菜食を選んでいる人達の方が問題行動も少なく、精神的にも安定し、聖書研究をしたいという申し出も多いそうです。このように、食べ物によって体だけでなくわたしたちの心の状態も変化するのだとしたら、わたしたちの魂にも影響を及ぼさないはずはありません。「全組織に情報を伝える脳神経は、天と人間が交わり、人の内なる生活を感化する唯一の媒介である。神経組織の電流の循環を妨げるものは何であっても活力を弱め、その結果は精神の感受性を麻痺させる」（2T347）。脳、とくに前頭葉を通して、わたしたちは神様とコミュニケーションをとっていますが、食事だけではなく、健康の10原則全ての要素がわたしたちの脳に影響を及ぼします。神様のみこころをもっと深く理解し、心の王座にいつもイエス様をお迎えし、ふたたび神の宮となるために、霊と肉体の10原則に従っていく力を日々神様からいただきたいと思います。

「健康改革の大目的は、知性と魂と身体を可能な限り最高に発育させることであるということを忘れてはいけない。神の律法であるすべての自然の法則は、我々の益のために計画されたのである。これに従うことは、現世での幸福を増進し、来世への準備をするのに助けとなる。」（CDF18）



肉体と霊性の関係

「愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ健やかであるようにと、わたしは祈っている。」3 ヨハネ 2

健康の 10 原則	Physical side 肉体的側面	Spiritual side 霊的側面
1. きれいな空気	呼吸：姿勢が大切。 新鮮な空気を得るために、田舎へ出る。	祈りは魂の呼吸である（あ上 82）。
2. 日光	外で活動する。 日光による殺菌作用：部屋の中にも日光を入れる。布団を干す。	義の太陽イエスキリストを仰ぎ見る（マラキ 4:2）。世の光キリスト（ヨハネ 8:12）のように輝く「あなたがたは世の光である」（マタイ 5:14）。
3. 自制	バランスがとれた生活。 何でもやりすぎない（良い事であっても）。	自制は御霊の実（ガラテヤ 5:23）。朽ちない冠を得るために節制する（1 コリント 9:25）。節制はキリスト再臨に備えさせる働きの一部（希上 100）。
4. 休息	活動の前の休息（アダムとエバはまず安息日を迎えた）。 12 時前の睡眠は 12 時以後に比べ 2 倍の効果。	キリストによる魂の休息（マタイ 11:28）。罪の重荷を取り除くことができるのはキリストだけ。主はわれわれに休みを与えられる（希中 48）。
5. 運動	体を動かすことで筋力、持久力、体力が増進する。循環促進、精神安定作用。	霊的エクササイズ：活動は生命の法則である（キ実 365）。感覚を働かせる訓練（ペテロ 5:14）。 信心の訓練（1 テモテ 4:7）—信心 Godliness 神のようになること。
6. 適切な食事	何を、いつ、どのように、どのくらい食べるか。 CDF 参照	人はパンだけで生きるものではない（マタイ 4:4、申命記 8:3）。霊の糧を得る：何を、いつ、どのように、どのくらい食べるか－朝早くみ言葉を読む。真理の宝石を集める。キリストが命のパン（ヨハネ 6:15）。
7. 水の使用	水は神が下さった最高の飲み物 入浴、水治療の効果。	生ける命の水キリスト（ヨハネ 4:14）。生ける水の源（エレミヤ 2:13）によって潤され、神の水路となる（イザヤ 58:11）。再生の洗いを受ける（テトス 3:5）。
8. 神の力を信頼する	唯一の癒し主「わたしは主であってあなたをいやす者である」（出 15:26）。神の力なくしては真の改革はありえない。	すべての病を癒し、すべての不義を清める（詩篇 103:3）。魂の病、罪からの救い。この人による以外に救いはない（使徒 4:12）。神の力を信じる信仰によってキリストと共に生きる（コロサイ 2:13）。
9. 清潔	身体、衣服の清潔 住居の清潔、台所や外回り イスラエルの民の衛生から学ぶ	心の思い、魂の清潔：良心を清める（ヘブル 9:14）。 魂を清める（1 ペテロ 1:22）。キリストが清いように清く（1 ヨハネ 3:3）。神の目に清いとは？（ヤコブ 1:27）。清い心をつくりたまえ（詩篇 51:10）。神のみこころはわれわれが清くなること（1 テサロニケ 4:3～7）。
10. 服装	体をしめつけない服装 時、場所、状況にあった服装 クリスチャンらしい服装 健康的、質素、気品、経済的	霊の飾り（1 ペテロ 3:3、4）。さんびの衣（イザヤ 61:3）。義の衣、救いの衣（イザヤ 61:10）。汚れた衣を脱がせなさい（ゼカリヤ 3:4、国下 196）。勝利の白い衣（黙示録 3:5、18）。汚れのない麻布の衣（黙示録 19:8）。

新刊：　「神との交わり」　¥450

どのように神と交わり、祈ったらいいのか一証の書から答えを見いだす。

朝の読み物としても最適！

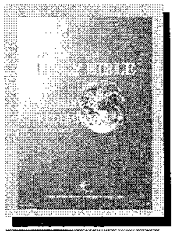
書籍案内

内容：
E.G.ホワイト注解(翻訳・出版されていないもの)
脚注
引照付き
地図、チャート
金のりんご
主題別聖書研究
E.G.ホワイト著書の聖句索引
聖書語句索引

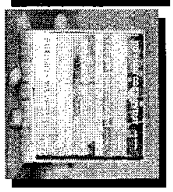
この「スタディ バイブル」は、弊社が1991年度から初版（英文）を、1995年度に第二版（標準英文版）を発行して以来、年月の重なるに従って、その重要性が増してきました。その後、数多くの出版社を通じて韓国語版（1995年）とスペイン語版（1998年）が出版されました。それからアメリカのミッション出版社からはReview and Herald 印刷所を通じて現在までの出版が続いており、また、数多くの国々で各種の方言での出版が続いています。「スタディ バイブル」は10余年の歴史の中で多くのキリスト者の方々に貴重な聖書として評価されています。

スタディーバイブル年末年始セール：　１２月，１月の期間

- ファミリーサイズ(超大型) ２０％割引—¥18,000→¥14,400
  スタディーバイブル講壇用、お年寄りの方々におすすめ。
- 中型、小型スナップのみ　10%割引

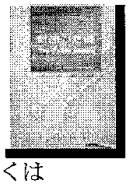


- 英文：Holy Bible(KJV) and the Spirit of Prophecy
  大争闘シリーズ、祝福の山、キリストの実物教訓、キリストへの道
  聖書には、証の書の参照ページが記されている。革製—¥5,500
- 英文：大争闘シリーズ＋SC,MB,COL－¥4,000



- 英文：ポケット大争闘シリーズ＋SC,MB,COL ¥—4,000

現代の真理：¥1500



前途の危機　¥1、800

ご注文は：サンライズ・ミニストリー　もしくは
永遠の福音出版　　福岡県八女郡矢部村北矢部 7339
Tel & Fax: 0943-47-2214

発行：サンライズ・ミニストリー
〒905-0428　沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471
Tel: 0980-56-2783　Fax: 0980-56-2881　Email: sanchor@cosmos.ne.jp
郵便振り込み番号：　02080-0-12121